



江崎士郎 (東京都世田谷区立弦巻中学校)

### 1. 本書の構成

本書の副題は「歴史と現代的課題」である。第1章から第4章までで、アメリカにおける環境教育の萌芽、発展、その後の前進や後退の歴史を述べている。

第5章、第6章で、新たに直面した課題、それをどう克服するかかの提案がある。こちらの方が読み応えがあるし、日本の学校関係者にとって有効だと考える。著者の思いも同様ではないだろうか。というのも、本書の半分以上のべ

ージが5章6章に当てられているのである。

### 2. アメリカの環境教育

アメリカの環境教育は自然の実際に触れる活動、野外での活動に始まった。日本で言えば自然教室や移動教室などの活動か。

これに衝撃を与えたのは、レイチェル・カーソン「沈黙の春」(1962年)である。1970年の環境教育法発効により勢いをもって進んでいく。行政の援助もあり、カリキュラムの開発も進んでいく。

1980年代に後退の時期に入る。反環境運動として「ヨモギの反

乱」が紹介されているが、由来がいまひとつわからない。後退の理由として、世論の関心の低下や政治的な影響がある。しかし、著者は環境教育が専門分化し、内容のまとまりがないことを指摘する。

### 3. 二つの試練

その後の環境教育には大きく二つの試練が待っていた。その一つは公立学校の学力問題である。

2001年に「おちこぼれをつくらないための初等・中等教育法」が成立した。学力テストの実施、目標達成できない学校への学力引き上げの義務づけ、そのために起

## アメリカの環境教育 —歴史と現代的課題—

萩原 彰〔著〕

A5判 税込定価2,940円  
学術出版会



### 【キーワード】

環境教育  
学力問題  
環境正義

こったテストのための授業、教員の士気低下と進んでいく。これにより環境を学習する意義が失われた。読んでいて、本当にそうなのかと疑ってしまうくらいである。

日本でも文科省や各行政での「学力テスト」が実施されている。低い結果の地域や学校は改善の取り組みを行っているが、アメリカほどではない(ここで、昨年の大阪の選挙を思い浮かべた)。

もう一つの試練を著者は「環境正義」と呼んでいる。環境問題に対応していくと、貧困層やマイノリティがそのしわ寄せを受ける。

環境問題に取り組む人々は圧倒的に白人中産階級であり、マイノリティの人々は環境問題よりもむしろ社会的、経済的な問題に直面しているのである。それにどう取り組むか。

### 4. 課題を乗り越えるために

本書では、全米環境教育スタンダードの作成を紹介している。スタンダードというと、日本では学習指導要領ということになるが、その内容はかなり違う。問題解決の学習への取り組み方などの紹介にページを当てているのも、著者の思いだろう。

また、アメリカでは子どもが自然と触れ合うことが少なくなったため、学力も含めて多くの弊害を生んでいるという指摘がなされた。この「自然欠乏症」の解決は環境教育にあるとして、活動が進んでいく。

環境教育は日本でも重要視されているものの、各教科や領域で個々に取り組んでいる印象が強い。これをまとめて体系化したカリキュラムとし、環境教育から教育を変えていこうとするのが本書のねらいだろう。